

飯島半十郎(虚心)「蒔絵師伝」の成立と漆工研究

東京文化財研究所 高尾 曜

飯島半十郎(号、虚心)(1841~1901)は、『浮世絵師便覧』・『葛飾北斎伝』・『河鍋暁斎翁伝』などの著書をなし、浮世絵研究の先駆者として知られる。一方で漆工芸に関する研究を行ったことは、ほとんど知られていない。本発表で取り上げるのは、その稿本「蒔絵師伝」で、漆工人に関する初のまとまった伝記資料であり、没後に刊行された『蒔絵師伝・塗師伝』は、その後の漆工人研究に活用された。しかし数種の写本や没後の刊行本との関係などの研究はされていなかった。そこで「蒔絵師伝」の成立時期と過程を明らかにする。

「蒔絵師伝」の稿本はこれまで四、五組が知られていたが、合計九組を確認した。内容・各工人の配列順序から分類すると五種類に大別でき、仮に草稿Ⅰ、写本Ⅱ~Ⅴとした。その最初期の草稿Ⅰは存在すら知られなかったが、東京藝術大学附属図書館蔵で、自筆で自らの校訂や典拠も記される。成立の上限は、引用される文献から明治29年(1896)と判断した。これを初稿として、写本Ⅱ~Ⅴまでの間に改訂が繰り返されるが、各本の比較によりその意図が明らかになった。すなわち蒔絵師と塗師とに大別し、流派別・時代順とし、増補しながら改訂を繰り返して写本Ⅳが完成し、その成立の上限は、明治31年(1898)と判断できる。これに挿図を加えたのが写本Ⅴであり、刊行を計画したことが推測されるが、未刊のままこの直後に没した。

没後20年以上の後、この稿本を再編集・増補して一連の『芸苑叢書』の一部として吉川弘文館が刊行したのが『蒔絵師伝・塗師伝』だが、著者の名は記されず、漆工研究で虚心の名は残らなかった。また改訂途中の写本Ⅲを底本としているため、著者の意思とは無関係に出版されたと考えられる。

飯島半十郎に関する研究は、すでに大曲駒村・玉林晴朗・吉田漱・鈴木重三によってなされている。しかし漆工関係の研究については、「蒔絵師伝」・「漆器製造法」・「漆樹蒔植並採集法」・「蒔絵工程」の書名が示されたに過ぎない。他の稿本として「塗師通覧」・「髹漆雜記」・「漆工要覧」・「幸阿弥家記・幸阿弥家蒔絵品目」・「幸阿弥家系」・「蒔絵通覧」・「蒔絵史」を新たに提示する。この内、漆工の技法書である「漆器製造法」・「塗師通覧」が、それぞれ明治15年(1882)、明治24年(1891)に完成していたことは注目される。その研究は漆樹や漆工技法にはじまり、晩年に漆工史研究に移行したと考えられる。漆工史研究の時期と活動が、浮世絵研究と連動していたことも考察する。

また「蒔絵師伝」が単なる書誌的研究にとどまらず、在野で資料を収集し、関係する古老から聞き取りし、古作品を実見し、さらにその製造法を熟知したうえで成し遂げた偉業であったことを評価する。没後刊行された『蒔絵師伝・塗師伝』が、結果的には、ごく近年まで活用され続けた数少ない漆工人研究の基礎資料となったことを評価する。